

ドイツ18世紀前半における〈閉経〉の意味

——ある内科医の症例集から——

The Meaning of “Menopause” in Early Eighteenth-Century Germany

原 葉子

Menopause, or climacteric, is defined as the phase in the aging of women that marks the transition from the reproductive phase to the non-reproductive phase. However, this is a very modern definition. How was menopause or climacteric defined in the preindustrial society? This paper attempts to understand how menopause was defined in early eighteenth-century Germany. The framework of the discussion relies on the work of Barbara Duden, who clarified the understanding that a physician and his patients had about the human body, in northern Germany around the year 1730. In conclusion, menopause was identified as being a rather critical point in a woman's life as opposed to an obvious transition between reproduction and non-reproduction, and no “menopausal disorder”—in the modern sense—was experienced by the women of that period.

Key words : menopause/climacteric medical discourse eighteenth-century Germany

現在、閉経／更年期は「生殖期から非生殖期への移行」と定義づけられているが、この捉え方はきわめて近代的なものである。本稿では、閉経／更年期概念が成立する以前のドイツ18世紀前半を例にとり、そこにおける「月経の閉止」の意味づけを検証している。考察に当たっては、Barbara Dudenの『女の皮膚の下』(1987=1994)の枠組みに依拠し、Johann Storchの『婦人病』を史料としている。Storchの著作にあらわれている月経観についてはDudenがすでに考察しているが、さらに「月経の閉止」の意味にまで踏みこむと、どのようなことが言えるのか。結論として、月経の閉止は「フルス／流れ」が滞ることによる危険な時であるが、月経の閉止による「再生産／非再生産」の境界は曖昧なものであること、また現代的な「更年期」の概念はないことが見出された。

キーワード： 閉経／更年期 医学言説 ドイツ18世紀

1. 問題の所在

現代社会において、menopause/climacteric (閉経／更年期)は、女性のライフサイクルの重要な局面として焦点化されている。アメリカではすでに1960年代以降、ホルモン補充療法(HRT)による「更年期の治療」が始まるとともに、「更年期」は女性ホルモンの「欠乏病(deficiency disease)」として位置づけられたと指摘されている(McCrea 1983)。また、1990年代の初頭にはベビーブーマーがその射程に入ったことでmenopauseに関する情報が増加し、衰退への転換という重要なライフイベントとして再構築されるようになったという(Gullette 1997:176-7)。日本でも「閉経／更年期」は、後発ながら、ここ数十年の間に注目を集めるようになってきた(山本2001)。こうした中で、女性のライフサイクルの一部が、医療側により提示された「更年期」モデル¹によって「医療化」されていくことへの批判が高まり、異文化との比較研究による相対化の試み(cf. Lock 1993=2005; Kosack u. Krasberg 2002)をはじめ、menopauseの持つ曖昧性、多義性などが強調されるようになってきている。

しかし、異文化間比較には難問もつきまとう。日本と北米の「更年期」を比較研究したMargaret Lockは次のように述べる。

しかし、ここで新たな困難がもちあがる。(…)われわれは、共通の視覚的・言語的表象によってその存在を分節化できる範囲内でしか、自分の内面を理解することができない。(…)その[肉体的な]活動の大部分には共通の指示対象、つまり外部に投影して共通のものとする対象がない。ほとんどの感覚は身体の活動とは関係ないので、その活動を言い表す日常言語は存在し

ない。われわれの身体はわれわれ自身にも気づかれずに、ひっそりと隠れて活動を続ける。たとえ身体感覚に気づいた時でも、文化的に共有された表出という慣用表現を通してしか、十分に意識することができない。このプロセスは選択的であるから、多くの感覚は基本的に気づかれず、したがって言葉に表されることもなく終わる(Lock 1993=2005: 22)。

つまり、ある身体現象についての概念が無ければ、それが認識されることは困難であるし、認識されたとしても表現手段による限定を受ける。あるいは、異文化間にたまたま同じ概念があったとしても、それが同じ身体現象を指示しているかどうかは分からない。このようなアポリアが認識されるなかで、「閉経／更年期」をめぐる言説は、イーミックな観点で理解することが求められるようになっていけると言える(Richters 2002: 27)。

こうした要請は、同様に歴史研究に対しても向けられよう。Joel Wilbush (1979)によると、menopauseという言葉は、1816年にフランスのGardanneによって造られた言葉であるが、イギリスの医学事典にその言葉が載るのは1880年代の後半であったという。ドイツでも、著者の調べたところでは、Menopauseという用語が広まり、また「更年期」を表すKlimakteriumという語が現在の意味に近くなるのは19世紀後半のことである(原2003)。つまり、「閉経／更年期」とはきわめて歴史の浅い、近代的な概念なのである。このmenopauseという概念がどのようなプロセスを経て成立したかについては、検討の機会を別に設けたい。本稿の目的は、近代的なmenopauseという概念ができる以前において、月経の閉止という事象がどのようなものとして捉えられ、位置づけられていた

のかを検証していくことにある。ここではその考察にあたって、Barbara Dudenの著書『女の皮膚の下:18世紀のある医師とその患者たち』(原題 *Geschichte unter der Haut: Ein Eisenacher Arzt und seine Patientinnen um 1730*)に注目する。

Dudenは、ドイツ北部の地方都市で18世紀前半に診療活動を行っていたJohann Storch (1681 ~ 1751)という一人の内科医²が、後進のために書き残した症例集(『婦人病』全8巻1747-52)を史料として、当時の医者や女性の身体観を再構築した。Dudenによると、当時「生殖/再生産(Reproduktion)」という概念はまだ成立していなかったという。「再生産」とは近代的な用語であり、妊娠、出産、授乳、育児といった一連の行為を示す概念である。18世紀の症例集には、「子産み(Generatio³)」といった概念はあっても、そうした「再生産」に相当するような総体としての概念はないという。そして、今日のような「再生産」という言葉は、19世紀の半ばに、経済用語としての「生産」という概念の対語として出てきたのだという(Duden 1987=1994: 48-9)⁴。

現在、日本語で「更年期」と訳される climacteric は「女性のエイジングにおける再生産期から非再生産期への移行を印す時期」と定義されている⁵。このような「(生殖期)から(非生殖期)への移行期間」という意味は、Dudenの考察に依拠するならば、近代的な捉え方だということになる。それでは、近代以前の「月経の閉止」は、どのような含意を持つものであったのか。

Dudenは、女性の身体をめぐる「フルス/流れ(Fluß⁶)」を、内科医Storchと患者たちのもつ身体観における中心的な概念として打ち出している。そこでは月経も、体内のさまざまな「フルス」のひとつの形であると理解されている。しかし「月経の閉止」はどのような意味を付与されているのかという点について、Dudenはあまり踏みこんでいない。Dudenの使った史料は、症例集という性質上、患者ひとりひとりの経過を跡付けることができるという点で、貴重なものである。とくに、Storchの記述には独特の身体観が展開されており、これを再検討することには大きな意義があると思われる。

このような認識から、本稿では、Dudenの論考に依拠しつつ、Storchの『婦人病』に収められた症例のうち40歳以上のケースを考察対象とし、内科医Storchのもつ「月経の閉止」のかたちを検証していくことにする。なお、正確に言えばこの史料の書き手は医者であり、女性が訴える症状は医者の言葉で書き直され、ときには医者の質問によって引き出されている。DudenはStorchのもつ身体観と患者のそれとを分別しているが、ここでは地方の一内科医による言説として捉えることにしたい。まず第2節では、ヨーロッパ18世紀の月経と閉経の捉え方を概観する。第3節ではDudenの枠組みを確認し、第4節でJohann Storchの『婦人病』の症例から「月経の閉止」がどのように捉えられているかを見ていくことにする。

なお、本論に入る前に、用語について検討しておきたい。menopause(英)/Menopause(独)は日本語で言うところの「閉経」、climacteric(英)/Klimakterium(独)は「更年期」と大筋で置き換えられるが、英語およびドイツ語と、日本語の用語は、必ずしも1対1で対応していない。menopause/Menopauseは、往々にして日本語の「更年期」に近い意味でも使われているうえ、menopause/Menopause、climacteric/Klimakteriumのいずれも「更年期障害」までを含意する⁷。本稿では、月経の閉止を「閉経」、「閉経」の前後を含め「更年期障害」を包摂する期間を「更年期」として使用することにする。

2. 18世紀の「月経」モデル

ヨーロッパ近代初期において、医学者のあいだでは、月経が女性にとって何らかの有用なプロセスだと認識されていたが、その仕組みについては諸説があった。主立った理論のひとつは、月経を女性身体のカタルシスのプロセスとして捉える「浄化(purification)」モデルである。この「浄化」モデルでは、女性は男性に比べ熱が少ないなどの劣等性により、体内に不良な血液や物質が蓄積するために、それを定期的に排出しているのだと説明された。排出された血液は有毒であるため、植物や虫を殺し、鏡を暗くし、また不妊や流産、狂気を引き起こす。月経が閉止するのは、そのような有毒なものを出す力が不足し、また熱が不十分で月経を作れなくなるからであり、月経閉止後の女性の身体は不純物や汚物で満たされると想像された(Stolberg 1999: 407-8; Schäfer 2003: 96; Crawford 1981: 50-1)。このような「浄化」モデルは次第に疑問視されるようになるが、17世紀から18世紀初めまでは、「浄化」モデルと似たコンセプトをもつ「発酵(fermentation)」モデルによって修正・吸収されるかたちで永らえていた。「発酵」モデルは、月経の要因を血液の定期的な発酵に求めるものだったが、やはり閉経後の女性は排泄物が体内に溜まり、病気になるやすうとしていた(Stolberg 1999: 411)。

しかし、17世紀末から18世紀前半にかけて最も支配的であった学説は、月経血を女性のもつ余剰な血液が排出されたものであるとする「多血症(plethora)」モデルであった。これによると、女性はもともと、自分が消化した食物から、自分自身に必要な分量以上に血液を作る性質をもっている。ここで作られた余剰な血液は、子宮内の胎児を養い、出産後は母乳となるはずのものであるが、妊娠が成立しなければ月経として排出されるのである。ときには女性の血液そのものが不純となって排出されることがあったが、それは不規則なものだとされた。この理論における月経の閉止は、血液を排出する力の弱まりや、老化した繊維質が固くなること、子宮管の狭小化または消滅などにより、余剰な血液を排出することが困難になっていく現象として説明された。そのため、月経が閉止したあとの女性は血液過剰な状態になり、数々の不調が現れるとされていた(Stolberg 1999: 408, 425)。ただしこのモデルは、実際には、理論上は相容れない前者のモデルとも融合した形で受け容れられていったという(Crawford 1981:52-3)。

3. Duden『女の皮膚の下』の枠組み

前述のように、Dudenは『女の皮膚の下』のなかで、Storchが書き残した18世紀前半の婦人病の症例集を分析し、いくつかの洞察に富んだ見解を出している。Dudenは、Foucaultを引きながら、われわれが現在自明のこととしている身体(「持つ身体」=近代的身体)は、18世紀末にようやく成立したものであるとし、そうした「近代的身体」の成立に、医学の発達は寄与していないとする。すなわち、「近代的身体」を作り上げたものは、社会的、経済的な他の諸相と共有されている、時代の中心思想や思考様式なのであり、近代的身体は近代的人間像、すなわち「ホモ・エコノミクス」の他の様相と一致しているのである(Duden 1987=1994: 17-9)。

こうした「近代的身体」を共有しない、女性の不調の訴えと、それに対するStorchの診断、処方を書いた症例集は、現在の西洋医学の視点から見るとほとんど整合性のない話の集成である。しかしDudenは、その膨大な記録の中に、症例集の著者とその患者の身体観を貫いているいくつかの「原理」があることを見出した。そのなか

で、月経に関する知見は、大きくまとめると次のようになるだろう。

まず、序章でも述べたとおり、Storchの時代に「生殖／再生産」という概念はなかったということである。その意味において子宮はまだ再生産器官になっておらず、受精、受胎、妊娠、出産、授乳を総合した概念もない。第二に、月経は原則として子どもを産むのに必要な事項ではあるが、絶対必要というわけでもない。なぜなら、月経が無くても子どもを産む人がいたからであり、また逆に、子どもや高齢の女性で月経がある人もいたからである。さらに、月経がなくても、その代わりに他の箇所から出血することもあったし、血液以外のものがあたまも月経のように定期的に排出されることもあった。身体の開口部はいずれも体内のものを排出する出口であり、そこから排出される様々な物質のあいだに意味の差異はない。第三に、月経は汚物や不純物を排出する、体内浄化に必要な作用だということであった。月経を排出することで身体は軽くなる。月経が滞ることによって、過剰な物質が滞留する恐れがあるため、月経が出ないときは、瀉血によって排出を促すことも重要な処置であった。第四に、月経は、激しい感情や外部からの刺激の影響を多大に受けるため、ちょっとした出来事が月経の滞りを招く原因となった。そして第五に、男性でも月経に似たような排出をすることがあった。男女の相違は月経があるか無いかではなく、出血または液体の排出が周期的かどうかによる。男性の場合の排出は金脈(=痔)を通した出血であったり、または血液以外のかたちで液体を排出することであったという。

Storchのもつこのような月経観は、医学の主流からまったく隔絶していたわけではなく、高齢になってからの月経再開や、幼児の月経、月経以外の出血が月経の代わりとなる代償出血、男性における金脈と女性の月経のアナロジーなどは、19世紀初頭まで他の医学書でも見られるモチーフである(cf. Osiander 1787; Bernstein 1795; Pierer 1816)。そのため、こうした身体観は、Storchが医学部で学んだはずのStahl理論などとは齟齬があった(Duden 1987=1994: 143, 171-2)ものの、医者のおいだではある程度共有されていたものだったのではないかと推測される。

4. 「月経の閉止」の意味

それでは、Storchの症例集において、「月経の閉止」とはどのような意味を持っていたのだろうか。本節では以下、大きく3つの柱を立てて考察していきたい。

(1) 「フルス」が滞ることによる「危険な時期」

Storchのテキストにおいては、月経の閉止は、身体へ大きな影響を与える「危険なとき」であった。たとえば、「胆汁-黒胆汁質⁸」の44歳の寡婦は、何ヶ月か前に月経が滞ったが、それが再び現れ、3週間のあいだ子宮の大出血の形をとって流れた。Storchの処方によって出血はおさまり、月経はそれ以上の不調をもたらすことなく消えた。この件に関して、彼は次のようにコメントしている。

このケースは自然の思慮深さを示す例である。自然は、月経の仕事を終える前に、すべての血を大出血によって解放しようとしている(…)。(Bd. 8, Casus CVII)

ここでは、定期的な出血が止まることによって血液が残留するのを防ぐため、「自然」が余剰なものを排出する目的で大出血を起こしたとされている。症状自体は激しいが、それはよい結果を導く前段

階であった。次のケースも同じような例である。

痩せ型の47歳の女性、結婚生活の中で3～4人の子どもがあり、月のものは終わるというよりもむしろ強くなっていたが、1733年11月18日、今やこの血の流れが6週間強く持続しており、そのため力が出ないと訴えた。[彼女は]このフルスが自然に従って終わろうとする年になっており、また私は、自然が完全に終わる前にすべての余剰な血液を運び去ろうとするという特別な思慮深さを表明する例をたくさん知っているのので、患者を、もうすぐすべてから解放されるからと慰めた。(Bd. 8, Casus CLIX)

Storchはこの女性に安静にするように指示、薬を処方する。それによってフルスは止まり、彼女がその年の12月と翌年3月に足に瀉血した後は、二度と出血が現れなかったという。一方、それとは逆に、月経の閉止が危険をもたらす例もある。

44歳の胆汁質の女性、何年も前に夫のもとを離れなければならない、心痛のなかで暮らしていたが、月の出血[=月経]が早めに終わったあと、消耗性疾患による咳と水腫のような腫れ物が出るようになった。彼女は薬を買う手段がなかったので、[私に]1738年2月1日になった1種類の薬を処方させたのみで、復活祭の頃亡くなった。止まった月経が危険を引き寄せるといふ証拠である。(Bd. 8, Casus CXCI)

ここでも、月経が止まるのが身体不調の発現と関連付けられているが、結果は患者の死という最悪のものである。月経の閉止は、自然の配慮もあれば生命の危険もあるというひとつの大きな節目の時として捉えられているが、そこに出る症状が吉凶どちらの兆しなのかは、結果を見るまで分からない。

また、46歳の痩せ型の女性は、月経の最中に激しい変化があってフルスが滞り、そのときから胃や胸に圧迫を感じ、また身体がむくむようになった。からだをよく観察すると、下半身に水腫があることが分かった。また上半身は肉が落ち、軽いものを食べても胃痛が起こり、足がさらに腫れた。Storchの処方では症状が少し緩和されたものの、患者はその2週間後に死去したという。それについて、彼は次のように述べている。

このご婦人がもっと若かったなら、月々の出血[=月経]を助けることによって、簡単に健康が回復したはずだ。しかし彼女は、もう少しでこの出血が終わるような年齢だったため、フルスの復元はうまくいかなかった(…)。(Bd. 8, Casus CLVIII)

ここでは、体調が悪くなった原因が、フルスが滞ったことにあると解釈され、そのフルスを元に戻すことが回復につながると思われる。しかし、月経が閉止する時期であったためにフルスをうまく導くことが難しく、回復させられないまま終わってしまった。ここで重視されているのは「月経の閉止」そのものよりも、月経が閉止したことによる体内のフルスの変化である。体内のフルスが滞り、フルスの誘導がうまくいかなるという意味において、月経閉止は重大な転換点なのである。ただし、この「危険なとき」に起こる体調の変化は、それが「自然」の配慮によるもので、結果的に体調好転につながるのか、月経閉止が引き寄せた生命の危険なのかについては、プロセスを最後まで見ないと分からない。どのようなプロ

セスが「正常」なのかということとは想定されており、最終的な結果に基づいて、症状はいかようにも読み替えられるのである。

(2) 「更年期障害」は存在しない

症例の中には、現代的な理解で言えば「更年期」症状を思わせるような記述がある。たとえば、「肥満して脂肪のついた、背はあまり高くない」47歳の女性は、月経が終わろうとするときになって、頭へ向かう強いほせと、神経質な頭痛がすると訴えた。Storchはそれに対して処方を書き、また、ほせをもっと下げるために、ふくらはぎをヒルに吸血させた。この女性は、このあと何年かにわたって、歯痛、頭痛、皮膚の痒み、目の炎症、胃痛、下痢、不安感、動悸などを次々に訴え、Storchはその都度対処している。最後にStorchはこう述べている。

このケースから、女性の月経が終わるときには、5～6年、またはそれ以上のあいだ、無秩序になり、さまざまな症状に見舞われることが分かる。若い頃や中年のころ、運よく血液の余剰なフルスがなければ、その終わりのときにも、月経が強かった人に起こりがちな激しい出血を恐れる必要はない。(Bd. 8, Casus X)

また、次のような症例もある。

1719年1月10日、49歳の農婦が、3年前に月経がなくなって以来、時々咳が出て、血か膿のようなものが混じった痰が出るという訴え、肺結核ではないかと恐れていた。彼女がそう病気になるようには見えず、また他の危険な症状も訴えなかったため、[私は]彼女を元気付け、この痰は、肺が悪くなっていることより、むしろ血液のフルスが止まったことに原因があるものと言った。今までやってきた吸引療法を、からだの上部分よりは下の方にすること、よく足浴をすること、春ごろには片足に瀉血をすること、を助言した。(Bd. 8, Casus XVIII)

こうした記述からは、月経が閉止するころ、身体の不調が起こることが認識されていることが分かる。しかし、出現する症状自体が閉経に特有なものとして解釈されているわけではない。たまたまこの時期におこった症状が、月経が止まったことに結び付けられているのであり、むしろそこで出る症状は、患者のそれまでの体質に関連付けられている。月経閉止期に発現するいろいろな症状は、定期的な「フルス」が止まったことに起因する身体内側の混乱によるものである。そうである以上、こうした不調の発現は月経閉止だけに伴うものではなく、フルスの滞るときにはいつでも必然的に起こり得ることだといえる。

(3) 曖昧な境界線

症例集には、高齢時における定期的な月経や、高齢になってからの再開も取り上げられている。こうした事象はともに月経閉止という「ライフイベント」を無効にするものであるが、この両者には全く異なる意味が与えられている。前者は健康と矛盾しないのに対し、後者は危険な兆候である。

痩せ型で胆汁質の、70歳の寡婦が、1723年7月28日に腰痛、それも片側の腰から足までの激しい痛みを訴え、片足を引き摺らないと歩けなくなった。原因を探したところ、彼女は、ま

だ規則正しく月経があること、2ヶ月前からそれがなく、それ以来痛みが出ていることを認めた。彼女はこれまでほとんど薬を必要としたことがないので、[私は]足と下半身にミルクの蒸気をあてることだけを助言し、これであらうして緩和しなかった場合には、痛いほうの脚のふくらはぎに水疱を起こす膏薬を貼るように言った。これで月経は再び始まり、痛みも消えた。(Bd. 8 Casus LXXII)

この女性はその後82歳まで生きた。それだけでなく、彼女の2歳下の妹も規則正しく月経があり、80歳まで生きたという。Storchは「このような[高齢で月経があるような]ことは全く稀とは言えないが、かといって日常的に起こることとも言えない。よって、他の著者による同じような経験を引いて補強しておくのが、若い後進にとって価値のあることだろう」と述べて、他の著作から同じような症例をいくつか引用している。ここからは、高齢になるまで月経を維持するという現象は通例ではないにしろ、何ら異常なものとして扱われているわけでもないことが読み取れる。ここでもまた、規範的なプロセスは存在していない。また、69歳の、「痩せ型で身分の高い婦人」については、以下のように記述されている。

彼女が侍医以外には誰にも話していない大きな秘密は、まだ月々の出血と白いおりものに悩まされており、さらに[身体]右側に脱腸(Bruch)があることだった。(Bd. 8, Casus CLXXX)

この婦人は1743年に76歳で死去するが、その後Storchは次のようにコメントしている。

このケースで変わっているのは、とくにこのご婦人が、高齢になるまで、不定期ではあるものかなり頻りに月の出血があり、時には大出血を起こしていたことだ。しかし彼女はたいがい食欲があり、美味な食事をし、ライン地方や外国産の古くて良いワインを飲んでいたので、失われたものをすぐに補充することができた。(Bd. 8, Casus CLXXX)

ここでは、高齢まで月経が継続している、すなわち閉経しないということはむしろ受容され、身体のエネギー保存の問題に置き換えられている。出血することはエネギーを失うことであるが、栄養のよい食事によって、そのロス部分は補充され、一定量を維持できる。身体エネギーが維持されている限りにおいて、この老婦人の月経は、問題のないものである。

一方で、いったん止まった月経があとから再開することは危険な兆候である。50歳くらいの粘液質-多血質の女性は、2年以上前に月経が来なくなり、昨冬はひんぱんに失神と心臓の痛みがあったと訴えた。その後大量に出血し、そのため心臓の辺りが軽くなったようにも感じたが、そのうちにとでもだるくなり、再び失神した。結局、この女性は死亡する。Storchは次のように記している。

このケースで気がつくのは、50歳になる女性に、もう長いこと止まっていた月経が再び現れたとき、それは自然が間違っただけを行っている徴だということである。女性の間で、年を取ってから月経が来たら死ぬ、と言われていることには根拠がある。なぜなら、自然が排泄を無秩序に、激しく行うときは、ほかのことでも適切な配慮がなく、そのため[患者が]死に至るからである。(Bd. 8, Casus CXXVI)

この場合、問題なのは月経が再開したこと自体よりも、そのことが「自然」が間違っただけであることを指し示すためである。つまり、高齢時における月経の再開とは、一連の混乱状態のなかであって目に見える形で出現する1つの記号として機能しているのだ。次の症例も同じようなケースである。

痩せ型で胆汁質の70歳の女性が、1729年11月30日、20年間なかった月経が数週間前に再びあったと説明し、何人かの女性に言われて不安になったので、これが何か有害なことなのか、それとも他の何かを意味しているのかについて質問してきた。[私は]その際とくに病的なことがなければ、危険な病気の心配はないと答えた。そして、彼女も良く知っている、もっと年配の二人姉妹の例を話して、[彼女を]元気付けた。しかし、経験から言うと、このような年配になって月経が始まった女性の場合、その先はあまり長くない。この女性の場合も、月経から四半年後に胸の炎症で亡くなった。(Bd. 8, Casus CXXX)

月経の再開は死に至るという認識はあっても、死亡の原因が生殖器系の病気にあるわけではない。一方で、高齢になってから出てくる月経が、危険だと決め付けることもできなかった。すでに20年間月経がない、貧しく70歳の痩せ型の女性に強い月経が起こったが、そのときの体調の不調はその後改善し、Storchが3年後にアイゼナハを去るときにもその女性はまだ存命であった。そのため彼は、「高齢になってから月経が再開すると、その女はすぐ死ぬ、というは必ずしも正しくない」というコメントを残している(Bd. 8, Casus CCII)。月経の再開という事象も、必ずしも危険をもたらすものではないのである。

さらに、次のような代償出血もまた、月経の閉止という境界線を曖昧にした。

ある50歳の女性、18歳くらいのときに、最初の、そして唯一の、体格がよくて背の高い娘を出産し、その産褥以来一度も月経がない。その代わりに、毎月3～4日間下痢をしている。だいたい我慢できるものだが、時おりひどいことがある。(…)この月々の下痢は、今年、他の女性の月経が消えるのと同じようになくなり、それで彼女はかなり長い間元気で健康だった。(Bd. 8, Casus XXXVIII)

月経がなくても他の形での排出によって月経が補償されることに加え、「閉経」すらもその代償月経によって演じられることが可能であることが示されている。ここでは、月経の閉止という境界線が曖昧なだけでなく、月経の閉止ということ自体が、時には異なる形をとって行われることが肯定されている。

5. まとめ

以上で論じてきたことをまとめると、次のようになるだろう。まず、月経が閉止することは、身体内のフルスの停滞と秩序の混乱につながっていることである。そのため、この時期はいろいろな症状や病気が出やすい時であるが、そこでの身体不調が最終的に良い結果をもたらすのか、回復しないで悪い結果になるのか、展開の可能性は両方にあった。このような、身体状態の分岐点という意味において、月経が閉止する時期はひとつの「危険な時」だといえる。しかし、問題は月経の閉止そのものより、むしろ月経が閉止したこと

による身体内部の無秩序状態にあった。第二に、「更年期障害」を思わせるような記述はあるが、それが閉経期特有の症状としては捉えられていない。前述のように、月経が閉止する時期は身体が無秩序状態であって、そのために何らかの症状が量的に増加することはあっても、それらの症状自体はどの時期にも起こりうるものである。第三に、月経閉止という女性のライフサイクルにおける境界線は、高齢まで規則正しく続いたり、高齢になってから再開したりする月経によって、しばしば無効となる。また代償出血による「閉経」は、月経閉止の意味を相対化する。

Storchは月経の閉止についての経験則はいくつか持っているが、それも絶対的なものではなく、症例はいつも例外に満ちている。高齢時の月経再開などが珍しいものであるという認識はあるが、かといって全く起こりえないことでもなく、それが異常や病気、逸脱につながるわけでもない。月経の再開は一般的に危険なものともみなせるとはいえ、必ず危険であるという保証もない。つまり、ここには規範的なプロセスが存在しないのである。

また、近代的概念のMenopauseが生殖/再生産する身体と、それが不可能な身体の境界を意味するのだとすれば、Storchの記述は近代的概念の価値観を何ら共有しないものとも言える。ひとつには、閉経という境界線自体が緩やかなものである点においてであり、また、月経が他の排出と同価値であるために、閉経も特権性をもたないという点においてである。女性の人生の中に組み込まれた「ライフイベント」としての「更年期」という概念も有されていない。

この「閉経」の意味が、どの程度の射程を持つものなのか、すなわち医学に限られたものなのか、他のファクターとの相互作用の文脈で捉えられるものなのか、あるいは時間的にどのくらいの広がりを持つものなのかについて、今後さらに資料を加えて検討したい。

注

- ただし、医療側の言説も単一のものではないことが指摘されている。「しばしば、それへの批判によって作りだされる印象とは異なり、臨床医学はひとつの統一された言説を形成しているわけではない。むしろそれは複数の競い合う言説の複合体なのである。そこには、科学、解剖学、生理学の言説があり、そこから発達した病理学理論の言説がある。また、心理学的、社会的、倫理的な言説があり、そして実践行為——技術的なものとモラル的なもの——の言説があり、多様な治療の介入による言説がある。そこにあるのは、単一の「医学的なまなざし」ではなく、複数のまなざしなのだ。同じことはmenopauseについても言える。Menopauseの単一の言説などは存在しない」(Komesaroff 1997: 56)
- 内科医(medicus)になるには一度は大学教育を受ける必要があったが、卒業することなく資格を得ることも可能だった。しかし、内科医の資格は営業や収入を保証するものではなく、内科医同士で対立があったのに加え、経験によって治療する者たち、すなわち外科医、床屋、風呂屋、産婆なども競合関係にあった(Duden 1987=1994: 78-90)。
- 17世紀にラテン語から借用された言葉で、現在では「生殖」を意味する。ここでは訳書の表記に従った。
- なお、19世紀半ばより前のドイツ語の医学書にもReproduktionという用語は出てくるが、管見の限りこれは個人々の生命活動の維持機能を意味しており、「生殖」の意味は持たない。
- 国際閉経学会(International Menopause Society)が1999年に出した定義による。原文は英語で、以下の通り。“The phase in the aging of women marking the transition from the reproductive phase to the non-reproductive state. This phase incorporates the perimenopause by extending for a longer variable period before and after the perimenopause.”(http://www.imsociety.org/pages/camsdef.html)
- 原語のFlußは「川」「流れ」を意味するが、Storchの症例集におけるFlußは、女性が体内に流れているものによって感じる痛み、身体から流れ出るもの、身体の流出口、などを示す多義的な語である(Duden 1987=1994: 175)。そのため、ここでは訳書が採用している「フルス」というカタカナ書きに倣うことにする。
- なお、日本語において「更年期」と「更年期障害」がしばしば混同されていることについては、山本(2001)を参照。

8. 体液説に基づく気質の分類で、粘液質は鈍重、多血質は楽観的、黒胆汁気質は憂鬱、胆汁気質は短気を表す。

一次資料(本稿で引用したもの)

- Bernstein, J. G., 1794-5, *Handbuch nach alphabetischer Ordnung*, Leipzig: Schwickert.
- Osiander, Friedrich Benjamin, 1787, *Beobachtungen, Abhandlungen und Nachrichten welche vorzüglich Krankheiten der Frauenzimmer und Kinder und die Entbindungswissenschaften betreffen*, Tübingen: Cottaische.
- Pierer, Johan Friedrich hrsg., 1994 [1816-29], *Medizinisches Realwörterbuch*, Erlangen: Fischer. [Microfish]
- Storch, Johann, 1753, *VIIIter u. letzter Band Von Weiber-Kranckheiten*, Gotha: Mevius.

参考文献

- Crawford, Patricia, 1981, "Attitude to Menstruation in Seventeenth-Century England," *Past & Present* 91, 47-73.
- Duden, Barbara 1987, *Geschichte unter der Haut: Ein Eisenacher Arzt und seine Patientinnen um 1730*, Stuttgart: Klett-Cotta. [1994, 井上茂子訳『女の皮膚の下: 18世紀のある医師とその患者たち』藤原書店]
- Gullette, Margaret Morganroth, 1997, "Menopause as Magic Marker: Discursive Consolidation in the United States, and Strategies for Cultural Combat," Paul A. Komesaroff et al. eds., *Reinterpreting Menopause: Cultural and Philosophical Issues*, NY: Routledge, 176-199.
- 原葉子, 2003, 「〈老人女性〉をめぐるまなざし——ドイツ19世紀～20世紀初頭の百科事典と医学事典から——」『お茶の水女子大学21世紀COEプログラム〈誕生から死までの人間発達科学〉平成14年度公募研究成果論文集』187-197.
- Komesaroff, Paul A., 1997, "Medicine and the Moral Space of the Menopausal Woman", Paul A. Komesaroff et al. eds., *Reinterpreting Menopause: Cultural and Philosophical Issues*, NY: Routledge, 54-74.
- Kosack, Godula u. Ulrike Krasberg hrsg., 2002, *Regel-lose Frauen: Wechseljahre im Kulturvergleich*, Königstein/Taunus: Ulrike Helmer.
- Lock, Margaret, 1993, *Encounters with Aging: Mythologies of Menopause in Japan and North America*, University of California Press. [2005, 江口重幸・山村宜子・北中淳子訳『更年期 日本女性が語るローカル・バイオロジー』みすず書房]
- McCrea, Frances B., 1983, "The Politics of Menopause: The 'Discovery of a Deficiency Disease'," *Social Problems*, Vol. 31, No. 1, 111-123.
- Richters, Annemiek, 2002, Die Wechseljahre als bio-kultureller und politischer Prozess. In: Godula Kosack und Ulrike Krasberg hrsg., *Regel-lose Frauen: Wechseljahre im Kulturvergleich*, Königstein/Taunus: Ulrike Helmer, 24-35.
- Schäfer, Daniel, 2003, Die alternde Frau in der frühneuzeitlichen Medizin: eine „vergessene“ Gruppe alter Menschen. In: *Sudhoffs Archiv*, Bd. 87, Heft 1, 90-108.
- Stolberg, Michael, 1999, "A Women's Hell? Medical Perceptions of Menopause in Preindustrial Europe," *Bulletin of the History of Medicine* 73, 404-428.
- Wilbush, Joel, 1979, "La Menopausie-The Birth of a Syndrome," *Maturitas* 1, 145-151.
- 山本祥子, 2001, 「更年期—医療化された女性の中高年期」黒田浩一郎編『医療社会学 のフロンティア—現代医療と社会—』世界思想社 193-216.